

だんおつせんもうるいだいぶぎん

そうえこう

壇越先亡累代諷經

回向文（総回向）

ぼさつじょうりょう

ひつじょうへう

しゅじょうしんすいきよ

ぼだい かげなか

に現ず。

自らは度らなくても、すべての人びとをまささきに、さどりの岸に度そうと願ひ続ける菩薩という聖を、きよく、

うるわしい月に、たとえようものなら、澄み切った大空に悠々と遊ぶごとく、何のさまたげも、こだわりもありはいたしません。そのように、この世に生けるたれも、かれもが、浄らかな心をもちつづけるとき、そのきよい心を水にたとえようものなら、そのような美しい心ねの水にこそ、またとえがたい「さとり」の影も宿るといふものであります。

あお こいねがわ

さんぼう

ふ しょうかん

た

仰ぎ 冀 くは三宝、俯して 照鑑を垂れたまえ。

うやうやしく仏法僧の三宝の威徳を仰ぎ、合掌礼拝して、三宝があきらかに、みそなわすよう願ひ望むものであります。

じょうらい

きょうしゆ

ふじゆ

あつ

かもんせんもうるいだいしょうれい

ろくしん

上来、経呪を諷誦す、集むる所の功德は、家門先亡累代精霊、六親

けんぞくしちせ

ぶも

うえんむえんさんがいばんれいほつかい

がんじきとう

えこう

眷属七世の父母、有縁無縁三界万靈法界の含識等に回向す。

さて、ただいま、仏の説き給う經典を誦誦いたしました。そのちからをめぐらして、何代にもわたる、この家の先祖や亡き方々のみたま、もつとも親しい六親等に及ぶ親類縁者、七代さかのぼつての直系父母、いやそればかりでなく、これまで因縁の有つたものも、縁もゆかりもない人々で、あらゆる世界にいます、よろずのみたまや、世界中にいまして靈識ある方々に、たむけるものであります。

こいねが

こうごう

とうげ

しんくう

みょうち

すなわ

げんぜん

冀 う所は、曠却の無明は、当下に消滅し、真空の妙智、即ち現前す

え

とん

むしやう

りやう

すみ

ぶつか

しょうち

ることを得。頓に無生を了じ、速やかに仏果を証せんことを

切にのぞむことは、始めのないほど久しく、ねづよい迷いや苦しみの根源となる無智の心が、いまここで、すぐに消えてしまい、そして、全くくだわりとさまたげのない、正しい理にめざめた、この上ない智慧が、直ちに眼のあたりに開かれて、いそぎ、生とか滅とか、分けへだてる迷いを離れたみちを、明らかにさとり、はやく、仏の位に達し、そのあかしをえまますようにと望むものであります。

櫻井秀雄 著 『修訂曹洞宗回向文講義』 曹洞宗宗務庁

昌興小住 金子 重典 合掌